

私の古典学習法

文教大学講師・本誌編集委員 米本 美雪 〈後編〉

「人書俱老」——人書俱ともに老ゆ



大学入学祝いに母が揃えてくれた書蹟名品叢刊の前で

前回は、書の古典を学ぶ意義や、楷書の古典学習法の一端を取り上げ、古典における根幹の捉え方についてご説明しました。

今回は主に、卒業論文のテーマとした孫過庭『書譜』の学習法についてご紹介します。「人書俱老」は『書譜』の文中にある語句です。「書を学び、書を通して人間性を磨き、共に進化して生きる」。この原点を基礎として常に書を高めていきたいと希求しています。

一 『書譜』との出逢い

今は亡き母が、書に特段の理解と関心を持つていたことから、大学入学時にそのお祝いとして、二玄社の書蹟名品叢刊全巻と、これら全てを収納する特注の書棚を揃えてくれました。その愛情と期待に応えるべく日々研鑽を積む中、ふと手にした法帖が、卒業論文のテーマとなる『書譜』でした。詳細については後述しますが、愚直なまでの心情溢れる筆遣いに心惹かれたのだと思います。

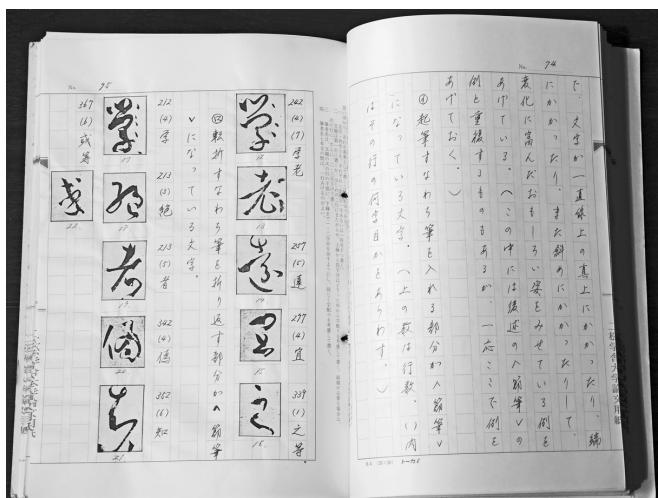
『書譜』の学習法について、筆者の経験を振り返ります。

II 『書譜』の古典学習法

『書譜』は、唐代に書かれた孫過庭の言論で、『十七帖』（王羲之）と共に草書の双璧と称されている古典です。熟視していくごとに、膨よかな変転自在な筆遣いに目を奪われた記憶が蘇ります。と同時に、普通では理解しがたい運筆に気づき、調べ始めました。これが卒業論文のテーマとなる、紙の折り目に筆が当たったためにできる、所謂「節筆」です。

一、節筆の文字を収集する

『書譜』の折り目は、全て山折りの状態であることから、紙を卷いてつぶした状態にして折り畳をつけたと考えられています（折り目説や空罫説など諸説あります）。当時制作した資料は残念ながら手元に残っておりませんが、記憶の範囲で再現したものが図1です。さらに、紙の折り目があつたと思われる部分に線を引いたものが図2です。今日でこそ、集字された出版物や節筆についての研究はなされていますが、学生時代、夏期休業中の大半を集字作業に費やしたことが思い出されます。



卒業論文

図1

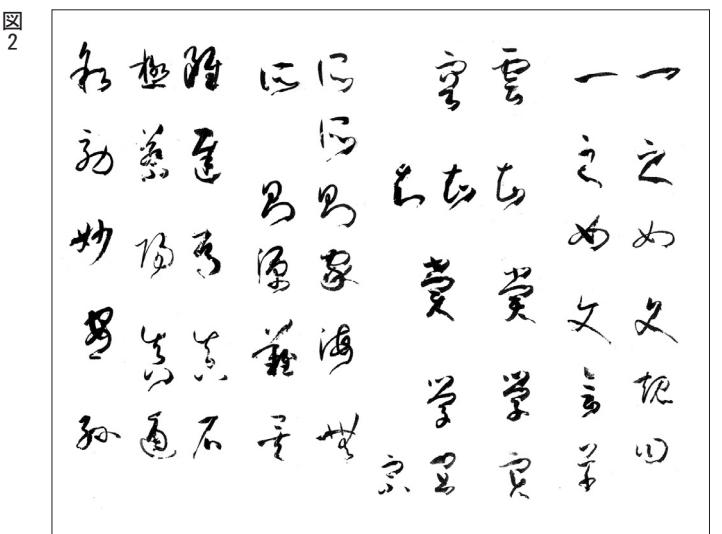
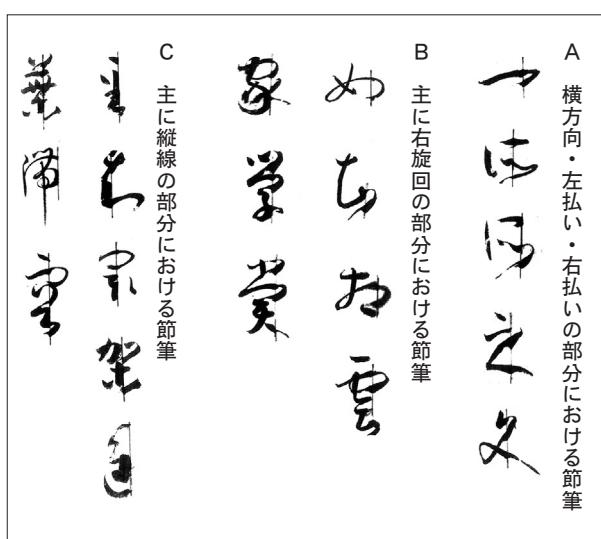


図2



A 横方向・左払い・右払いの部分における節筆

B 主に右旋回の部分における節筆

C 主に縦線の部分における節筆

二、結体法^(注1)を探る

先月号において、楷書の結構法を三法帖から取り上げましたが、「書譜」においても共通する要点です。臨書にあたり優先度の高い内容でありますので、図3に各項目の文字例を数例取り上げて記します。

図3

ここでは数例の結体法について、各項目で「書譜」に見られる結体の共通点は多々存在します。「書譜」が双璧として称される所以を探ってみてはいかがでしょうか。

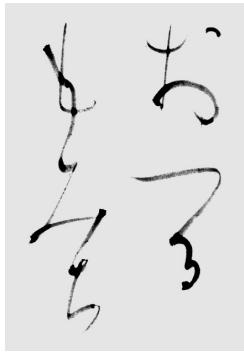
筆者の学習法は、古典を凝望することから始めます。その上で、古典の根幹に潜む結構・結体法をまとめます。まずは、形臨を確然たるものとすることが肝要であると考えるからです。

図3

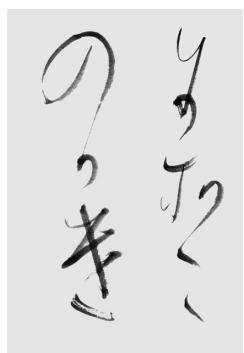
III 古筆^(注2)の学習法について

二回にわたり筆者の古典学習法について記してきましたが、古筆の学習法についても触れておきます。図7は『元永本古今和歌集』

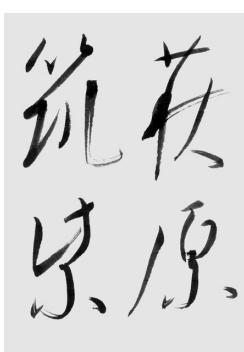
図7 『元永本古今和歌集』臨書作品（三十代）



（三十代）



（三十代）



（三十代）

（以下『元永本』とする）の臨書作品です。

古典の臨書方法と同様、半紙に少字数を拡大して臨書します。これにより、『元永本』の特徴である直筆と側筆の運筆や、仮名と調和した和様漢字の特徴を体得できます。古筆の字形や行脈など、詳細については紙幅に限り

ありますので割愛しますが、古筆にも古典の根幹に潜む共通点が多々見受けられます。古筆を通じ多くを学び、その探求に努力することをお勧めします。

また、臨書学習法の一つとして、「透写」（写し書き）という方法があります。尾上柴舟先生の「臨書学習の王道である」との考

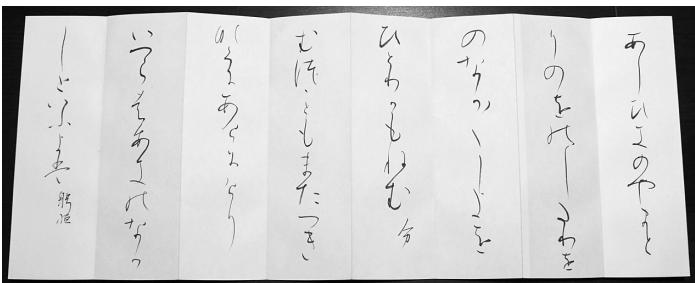
えによるものです。原本の上に透明な紙を置き写した後、原本を見ながら透写を繰り返し行い（写真左上）、次にこれらを応用して異なる語句を書き、それが原本と同じ趣にできていれば十分であると考えられていたと理解します。

平成二十五年七月に東京国立博物館にて、

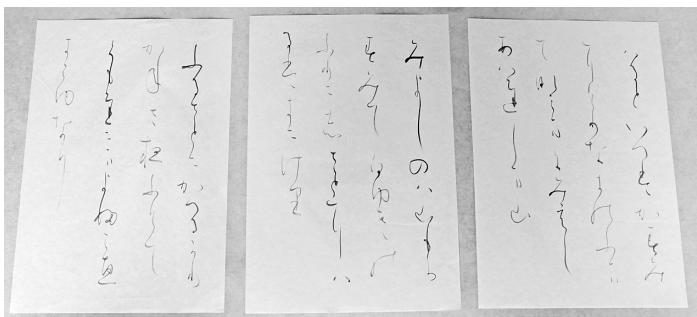
「和様の書」特別展が開催された折、島谷弘幸先生監修・解説『美しいかなが書ける本』が出版されました。同書の「国宝の写筆帳で名筆を書いてみよう」という欄において、先生は「繰り返し写筆（透写）することは、古筆のリズム感や息づかいを体感できる」と推奨しています。臨書学習法の一つとして取り組んでみてはいかがでしょうか。

以上、二回にわたり、書の古典・古筆の学習法の一部をご紹介しました。書を学ぶ上で参考になれば幸甚に存じます。

（注2）古筆＝平安から鎌倉時代に書かれた和様書道の優れた仮名や草仮名などの



『和漢朗詠集』折り帖作品（五十代）



仮名作品（最近の作品）



島谷弘幸先生監修・解説
『美しいかなが書ける本』
手本は氷田光風先生と筆者



写筆（透写）学習法
原本の上に透明な紙を置き写した後、原本を見ながら透写を繰り返し行う。
繰り返し透写することで、古筆のリズム感や息づかいを体感できる。

（注2）古筆＝平安から鎌倉時代に書かれた和様書道の優れた仮名や草仮名などの